

日本建国時に仕組まれた

# 一輪の秘密

《内容見本》

斎藤  
敏一

## プロローグ -- 三部作要旨

### ●本書の構成について

最初に、本書『日本建国時に仕組まれた一輪の秘密』の構成について説明しておきたい。本書は、以下のよう  
な三部構成になっている。

◎第一部 玉手箱編

プロローグ -- 三部作要旨

本文 第一章～第五章

◎第二部 生命樹編

本文 第六章～第十章

◎第三部 ミロク編

本文 第十一章～第十六章

エピローグ -- 三部作おさらい

本書は、神の経綸の書であると同時に、全人類に向けた福音の書である。

先ず、「神の経綸の書」の意味だが、本書は近い将来に地球の王Ⅱ世界天皇となられる人物に向けた「帝王学」

の書である。帝王とは神によって選ばれ定められる存在であるから、神の経綸は帝王にとって必須の学びであるという思想に基づいている。筆者が本書で語ろうとする帝王学とは、我々地球人類を導こうとしている神の経綸（「世界経綸」と呼ぶこともある）を解明することによって明らかになる内容を指している。本書では、神の経綸の中で最も重要な、「一厘の仕組」という言葉で表わされる内容を具体的に解き明かす。これはまさに世界天皇となられる人物に向けた内容である。

一厘の仕組とは、筆者の認識では、この日本におよそ1750年前（西暦270年頃）にアメノヒボコ（天日槍、天日矛とも書く。本当の名前は不明である）によって仕組まれた、極めて重要な神の計画のことだ。この計画の意味と内容が明らかになることにより、人類は晴れてハッピー・エンドを迎えることが可能になる。「一厘」という言葉は、大本教団の開祖・出口なお刀自の次のようなお筆先（明治二十五年旧正月某日、大本神諭・天の巻）に登場している。

「天理、金光、黒住、妙霊、先走り（これらは全て江戸末期から明治にかけての教派神道の教団名）、とどめに艮の金神（大本教団の主神・国常立命）が現れて、世の立替をいたすぞよ。世の立替のあるということ、どの神柱（前記の教派神道の教祖たち）にもわかりておれど、どうしたら立替ができるということは、わかりておらんぞよ。九分九厘までは知らしてあるが、もう一厘の肝腎のことは、わかりておらんぞよ。（太字・傍点は筆者）」

大本神諭以降の預言では、岡本天明師の日月神示で「一厘の仕組」という言葉がしばしば登場し、神様好きな人々の間では一種の流行言葉になっているようだ。ちなみに、「一厘の仕組」でGoogle検索すると約10万

件ヒットする（2017年5月現在）。

検索したついでに色々なホームページを覗いてみた。それらのコンテンツを見る限り、まだ本当に解き明かした人はいないようだ。「とどめに良の金神が現れて」と形容できるような出来事はまだ起きていないからである。その時が来たら、とどめの神が明確に姿を現わすことになっていくからだ。

筆者の場合、Amazonでのみ出版しているという事情があるが、Amazonの良いところは、あまり日を置かずに何回でも改訂を行えることだ。改版を繰り返しているうちに、本書は明らかに、「天子さま」個人に向けた内容を扱っていることが分かってきた。日月神示の天子さまとは、近い将来に世界天皇と成られる人物を意味している。すなわち、本書は世界天皇に向けた世界経緯の指南書であるという意味である。世界天皇とはどんなかについては、「**第二部 生命樹編**」で明らかにする。

本書の改訂中に、ついに「一厘の仕組」が解明できたのだ。正確に言えば、最初から一厘の仕組の秘密を解明する内容の本を書いていたことが明確になったのだ。よって、出口なお刀自に敬意を表して、敢えてその言葉を**使用することにした**。それは、「とどめの神」**人類共通の神**の正体が分かったと同時に、この本の中にその神がはつきりと降臨していることが納得できた。先ほどの大本神諭の「**どうしたら立替ができる**」ということは、**わかりておらん**という、その「**どうしたら**」が、本書にはハッキリ書かれているからである。遂に、筆者の長年の探求に対する回答が見つかったのだ。

本書は、一厘の仕組Ⅱ「とどめの神の教え」について三回解き明かすという構成になっている。

(1) プロローグ (第一部)

(2) 第一部〜第三部の各本文、全十六章

## (3) エピローグ (第三部)

筆者はかなり親切な（くどいとも言う）人間である。だから、改訂を繰り返すうちに本文だけで伝わらないケースも考慮して、都合三回も主要概念の説明を行うという構成になった。各々、切り口や表現方法が異なるので、単なる繰り返しではない。とにかく、読めば「一厘の仕組とは何か」が分かることになっている。頭で分かるだけでなく、最終的には貴方自身の五感・六感を含めた身体全体で分かる仕組になっている。

本書は、ただのミステリー解明本ではない。本書を読んで、筆者が提案している「あること」を実行すれば、誰でも神さまに会えるのだ。これが「全人類への福音の書」であるという意味である。神は全人類を現在のまま丸ごと救済される予定である。斎藤の認識の中では、もう既に救われてしまっている！

よって、聖書の黙示録や大本神論・日月神示で預言されているような最終戦争やカタストロフィーは起きない。本書のページを開いて読み進めれば、貴方の目の前にとどめの神ご自身が降臨されるはずだ。

こんな大それたことを大マジメに語る斎藤という人間は、大天才か大馬鹿野郎か単なる変人かのいずれかであろう。とにかく平均的な書物でないことは請け合うことができる。

本書は、「いつちよ、斎藤に騙されてみてはいかが（勿論、言葉のアヤである）」、という提案の書である。さらに、全人類は必ず救済されるという宣言の書である。それは、筆者の以下の宣言によって表明される。

\*1 あまのいわと天岩戸 は既に開き始めている。

今や「\*2 あまのいわとみろくの世」の助走期間に入ったのである。

\*1 天岩戸とは、日本神話に登場する、岩でできた洞窟。太陽神である天照大神が隠れ、世界が真っ暗になった天岩戸隠れの伝説の舞台。筆者は独自の解釈を持つ。本文(第二部のアマテラス関連の記述)を参照のこと。

\*2 「弥勒の世」、「みろく世」とも表される。起源は、大乘仏教の弥勒下生経などに求められる。「弥勒下生」の思想そのものは、ミトラ教起源であると考えられる。ミロクの世界とは、「弥勒菩薩がこの世にくだつて衆生を救うとされる未来の世」を意味している。大本教団や大本から派生した新宗教群によって、「救世主である弥勒が出現した理想的な世界」として、この言葉が使われるようになった。日本の精神世界系情報ネットでは、ミロク世の当来を待ち望む声が増大している。

「天岩戸が既に開き始めている」という宣言であるが、これは「今まで隠されていた人類共通の最高神がお出ましになろうとしている」という意味だ。冒頭に引用した大本神諭の、「とどめに良の金神が現れて」という事態が、本書の中で起きたのである。それは一体どういう意味なのか、まずはプロローグの中で語っていこう。

## ●世界神道の提唱

「世界神道」とは何か？

読者は、標題「世界神道の提唱」に対して、一体どのようなイメージを持たれるだろうか？

神道とは、通常日本古来の宗教だと考えられているが、「伝統的な神道が世界神道になることがどうして可能なのか？」と考える方もおられるだろう。

「世界神道」について説明する前に、そもそも神道とは何かについて簡単に触れておきたい。

筆者が高く評価する神道家である山陰基央師やまかげしんおう（古神道の教派である山陰神道の前管長。故人）の『よくわかる日本神道のすべて』（山陰基久著、日本文芸社、1997年）より紹介しよう。

とにかく『日本神道』には何も無い。

「教祖がない、教義がない、戒律がない、偶像シンボルがない、社殿がない、聖職者がいない、芸術がない、哲学書がない」

というのが神道である。

山陰師の『神道の神秘』（山陰基久著、春秋社、2000年）には、『何も無い』ゆえの悲劇』ということで、次のような説明がある。

かくて神道は“無教祖・無教義・無戒律・無偶像・無組織”である。

そしてそれがゆえに、外国の識者のみならず、日本人学者からも「宗教ではない」としばしば言われてきたのである。

（中略）

神道は、前述したように、教祖・教義・戒律・崇拜対象にはこだわらない。従って、どちらが優れているとか、どちらが真理であるといった論争をもたらすことがない。もともと神道は多神教であるから、誰がどの神格を、どのような仕方で信仰しようと、それが他をつぶそうという野心を見せたり、悪事をなさない限り、許容し受け入れるのである。それぞれの信仰や体験を大切に、平和共存を旨とするのである。

神道の特徴として特筆したいのは「言挙げしないという伝統」である。そのためか、神道の世界には「秘事語るべからず」というような雰囲気があつて、我々一般人が神社に行つても、黙つて玉串を捧げてお祓いを受けることはあつても、その神社の教えを聞くような機会はない。よつて、その神社の神様のことも知らないし、神社の信徒としての正しい信仰のあり方なども教えてもらえない。

山陰師はそのことをも十分に踏まえた上で、生前、多くの著作（数十冊存在する）を世に問うてこられた方だ。つまり、山陰師は大いに言挙げされた希<sup>けう</sup>有<sup>ゆう</sup>な神主であつたということになる。『神道の神秘』によれば、師の心は、「（山陰神道のような）純古の日本神道に秘められた宇宙観、自然観、靈魂観には、まことに目を見張らせる壮大な教えがある。その世界について広く世界に伝えたい」というものであつた。筆者が山陰師を神道家として高く評価する最大の理由は、前述のような、山陰師の神道普及に向けた志に深く共感したからだ。

筆者が古神道と呼ばれる日本の伝統に強く惹かれるのは、ひとえに山陰師のような熱意の神道家がおられるからである。「日本神道には何も無い」と語りながらも、その世界に分け入れれば壮大な教えが存在するというのが古神道の世界なのだ。

先に紹介した数行の説明は神道の性質を語るものではあるが、神道の教えは含まれていないので、少しも分かつたような気がしない。神道の世界観や教えに興味のある方は、是非とも山陰師の前掲著を参照されたい。いずれにせよ、日本神道というものは奥が深く、実に難しい代物なのである。

ただでさえ難しい日本神道なのに、「世界神道」などという新しい概念を提唱する筆者の意図を説明しなければならぬ。

先ず「世界神道」とは筆者の造語である。「世界神道」とは、大神呪「あじまりかん」を含む天皇行法を実践す



る道（方法論）である。天皇行法を實踐する道のことを、「あじまりかんの道」と呼ぶ。

なぜ「世界神道」なのか?! その命名には大きな理由がある。『あじまりかんの道』は全人類が丸ごと救われる道」だからである。これは科学的に立証できるのである（本書の「エピローグ」で立証する）。

「世界」という用語を使用する背景には、さらに深い理由が存在する。「あじまりかんの道」は科学的に証明されている方法論である。ただし、ここでいう「科学」とは、現代科学ではなく古神道の神霊科学である。なぜ「科学」なのか? それは、「あじまりかんの道」が、千七百年以上にわたって日本の宮中と山陰神道で実践され続けてきたことによって、その有効性が実証されているからである。「あじまりかんの道」が千七百年以上の時の流れに耐えて今も残っているという事実こそ、「世界神道」が科学性を具えていることの証なのだ。

科学性とは、誰でも、いつでも、どこでも神に至ることが可能であるという、「再現性」を意味している。「再現性」とは、「Aという操作や入力の結果として、必ずXという事象や出力が発生する」ことを意味している。通常は科学技術分野での実験、特に製品テスト等の領域で良く使われる用語である。筆者はプログラマーなので、自分が作ったプログラムのテストを行うというのが日常的な仕事である。そのため、特に再現性を重視する。神さまの世界、とりわけ、神の実体が存在すること、神の実体が個々の人間と直接触れ合うことが可能であるということ、本書を通じて実証したい。本書で扱うのは、神の実体が音声<sup>こゝろ</sup>トタマの働きによって、人間に直接的な影響を与えるという事実である。よって、**世界神道とは宗教ではなく、千七百年以上の経験に裏付けられた精神工学の体系である。**以下、詳しく説明しよう。

日本には千七百年以上の歴史を持つ「**天皇行法**」<sup>てんのうぎやうほう</sup>というメソッド体系が存在する。天皇行法とは、別名「**天**神道」とも呼ばれる天皇のための修行体系である。この特別な神道は、前述の山陰神道によって、八十代の永きにわたり秘密裏に伝承されたものだ。それが戦後になって公開され、「あじまりかん」という呪文で知られるよう

になった。この呪文は、それを知った人々から畏敬の念を込めて大神呪だいしんじゆと呼ばれているものだ。「あじまりかん」は、知る人ぞ知る大神呪として、千七百年以上の間、唱え続けられた。

この天皇行法が世界に向けて紹介されるのは、今回で二回目となる。前回は、佐藤定吉博士（故人）が著書『日本とはどんな国 秘められた人類救済の原理』で発表された（詳細は第三部に譲る）。

佐藤博士の『日本とはどんな国』が書かれたのは昭和三十四年だったが、博士は自身の遺作となった『日本とはどんな国』の出版を見ることなく、昭和三十六年に帰幽された。さぞかし心残りであったらう。

だが、同著は昭和三十九年に、同志の方達によって自費出版された。恐らく、日本国内のみでの出版であろう。筆者が手にしたのは、たま出版から昭和五十四年に出版された復刻版である。

佐藤博士は、同著の中で次のように語る。

日本は、並々の国家ではない。一つの活きものであったのだ。神の霊が盛られた国。神のいのちが、その活きものの「いのち」になっている国！

これが、日本であったのだ！

と、神の白光の中に引きあげられた祖国日本のすがたを私の霊は、じきじきに見たのであった。

「ここに日本の偉大さ、ここに日本の崇高さ、ここに日本が神国とよばれる所以があったのだ！」

と、理智を越えた霊的「さとり」が、私の心にひらけてきた。

（中略）

もし、私の在世中、この（＝前記の天啓の）論理的な確証が未完了に終ることがあったとしても、必ずや、この天啓をこの小僕に天授なし給うた活ける天父は、また引きつづいて、最も適当な主の器を選び出し、そ

の大によってこの一事が完成されるにちがいない。

私はその人のために前備えの靴の紐をとく者の一人に加えられるならば、その一つで生涯の努力は無駄でなかつたと感謝したい。

佐藤博士は同著の中で、次のテーマの**科学的立証**を目指した。

「日本国家は、神のいのちを形の上にあらわすための『神国の地上雛型国家』である」

その時からおよそ六十年経過した今、改めて佐藤博士が目指した方向で筆者も同テーマと格闘した。結論から言えば、佐藤博士のテーマ（靈的に認識された日本国家の本質）を科学的に立証することは、現時点では困難である。ただし、筆者は佐藤博士の追求テーマに関して、別の方向、即ち、日本建國史の解明作業を通じて具体的な状況証拠「天皇行法がいつ頃誰によって始められたか」を知り得た。だからこそ、思い切ってこの本を書いたのである。

ただし、佐藤博士と筆者では、大神呪「あじまりかん」の解釈が決定的に異なる。佐藤博士は、\*3川守田英二博士による「あじまりかん」のヘブライ語解釈「世の罪を負う祭司長」にこだわり過ぎて、正解にまで到達していない。「世の罪を負う祭司長」とは「救い主、あがな贖い主ぬしであるところの重要な祭を司る者」という意味である。熱心なキリスト教徒である佐藤博士はすっかり「世の罪を背負う」の訳に囚われてしまったのだ。「あじまりかん」は本来そのような意味であるはずがないと、筆者は考えたのである。

\*3 川守田英二博士はヘブライ語の詩歌の研究者で、日本古代の歌や民謡をヘブライ語で解釈するという方法論による、日ユ同祖論の論客として知られている。青森県下北から南部地方に伝わる民謡「ナニヤドヤラ」で、「ナニヤドヤラは古代ヘブライ語である」という説を発表し、1950年代の一時、全国的に有名になった。この説は、ラビ・トケイヤー師などの有力な研究者からは「学問的な裏付けが乏しい」という批判を浴びてもいる。筆者も、この種の説には余り興味がない。何故なら、川守田氏の「御前みまえに毛人えみしを討伐して、御前みまえに聖名なをほめ讃えん」などという解釈が恣意的であり、歴史的事実に基づいていないので、同意できないのである。

筆者は、佐藤博士の採択した解釈「世の罪を負う祭司長」には全く納得できなかった。それで、さらに先まで突き進んだのである。

本書のテーマは、「あじまりかん」の秘密解明という一事に尽きる。第三部の第十五章とエピソードで、「これ以上は無理」というところまで解明を行うので、請うご期待。

いずれにせよ、佐藤博士の『日本とはどんな国』が存在していなかったら、この本も世に出ることはなかった。霊界の山蔭基央氏と佐藤博士に謹んで本書を捧げたい。

本書の執筆開始時点では、筆者は「あじまりかん」の存在を全く忘れていた。実を言えば、四十年余り前、筆者が大学二年生だった時に、「あじまりかん」に出会っていたのだ。その経緯については、第三部で詳述するのでここでは述べない。だが、本書は筆者が「あじまりかん」を実際に唱えた結果として完成したのだ。この要旨で述べることは全て、「あじまりかん」を唱えることよって筆者の体内に神が降臨した結果として、自然に分かってきた内容である。筆者が高校時代に志して以来、四十年以上かけた研究「日本の歴史と神の解明」が、実質的に完了したのである。

本書は、少なくとも宗教に関しては最終結論Ⅱ「留めの書」となる存在である。その意味は次の通りである。

「世界神道」という言葉から「宗教の本だろう」と思われるかも知れない。確かに本書は宗教に関連したテーマを扱う。だが、これから旧態依然とした宗教を立ち上げようという話ではない。本書が目指すのは、その対極である。

すなわち、「この世から『従来の宗教というもの』が、きれいさっぱりと存在しなくなる時代を来たらせる」という宣言の書である。

何も、既存の宗教を無理矢理なくそうというのではない。本書の主旨は、いわゆる「宗教というもの」が自然になくなる、というものである。そして、宗教がなくなってしまうというのは、極めて近い将来の展望である。

### ● 宗教がなくなってしまう!?

どうして宗教がなくなってしまうのか! その心は?

「世界神道」が提唱するメソッド「あじまりかん」により、人類共通の神が誰にでも見えるようになる。すなわち、『あじまりかん』は神の直接体験をもたらす言葉である。だから、『あじまりかん』を唱えることにより、誰でも速やかに神を知る人となる。その結果、今までの宗教はその役目を終えて自然消滅する。

「人類共通の神が誰にでも見える」という意味は、筆者が発見した「あじまりかん」の性質に由来する。これは、「世界神道が精神工学である」という、冒頭の説明と密接な関連を持っている。不思議な呪文「あじまりかん」

を唱えると、その音響が持つメカニズムが発動し、神が降臨するのである。

「あじまりかん」を唱える場合、声に出すか出さないかは関係ない。とにかく唱えさえすれば、その言葉をこの世界にもたらした神を呼ぶ、スイッチが入るのだ。よって、誰がやってもスイッチが入り、神が降臨するのである。やれば分かることなのだ。

何しろ、この発見に至るまでに四十年以上の歳月がかかっている。それだけではない。本書執筆の最終段階でイエス・キリスト（勿論、生身の人間ではなく霊的存在である）と対峙して、イエスの磔刑にまつわる人類史の秘密を垣間見るといふ場面もあった。

「世界神道」というネーミングは決してハツタリではない。筆者の今回の発見により、人類が丸ごと救われる道が開かれるのだ。「人類丸ごと」である。ただ事じゃないのである。よって、多少の説明は必要だろう。以降は、「あじまりかん」の秘密を知るまでの経緯と、「あじまりかん」の効能書きである。

手始めに、筆者の宗教観、あるいは、宗教というものの定義を述べておいた方がよいだろう。さらに、筆者が本書執筆中に何を見たのか、何を体験したのかを詳細に語ることにしよう。

本書は宗教的な内容を、それも「人類が丸ごと救済される」などという空前絶後の内容を説こうとするものだ。だからこそ、その前に、その種のことを語ろうとする筆者自身の立脚点を明確にしておく必要がある。

先ず、筆者は宗教家ではなくソフトウェア技術者である。IT関係と言えば聞こえはいいが、ソフト開発は色々な意味できつい仕事だから、そのきつい仕事に還暦を過ぎてまで従事している自分自身に言いようのない誇りを持っている。そういう人間ではあるが、それはあくまで筆者の経済的な立ち位置でしかない。

一方、筆者は技術者である前に、熱心な求道者としての内面を持つ。神と神の国を愛する極めて宗教的な人間である。さらに、六十年余りの人生を通じて様々な宗教体験、神秘体験を重ね、神を知る人間となつて久しい。

筆者にとっては、神の存在は自明のものであり、これから神を求めて何かをしようといった気持ちはない。でも、自分が神について知り得たことを人に伝えるべきではないか……。

普通、この種の内面の告白は滅多にしない自分ではあるが、私にとって極めて「例外的な事態」が発生した。例外的な事態とは、私の中に「みろくの世が開けた」という認識が生じたことを意味する。「みろくの世」とは、今まで隠れていた「本当の神Ⅱ元の神Ⅱ根源神」が表に出る時代だという。やっと自分の出番が回ってきたという感覚である。いよいよ、自分が知り得た本当の神に関する見解を語る時が来たようだ。

## ● 「神」とはどんな存在か？

これから神について議論をしなければならぬが、最初に筆者の神観について説明しておこう。

本書内では、しばしば「神々」という表現が使われる。筆者は、唯一神（宇宙そのもの、法則そのものである）との直接交渉は不可能、あるいは、極めて困難だが、個々の神々とは直接交渉が可能だと認識しているからだ。よって、筆者は基本的に多神を認め、個別の神格について言及する場合には、単数形の「神」を使用する。その場合も多神の存在を前提としている。なお、神の定義については、後ほど詳述する。

筆者は、宗教が発生する源泉というものが存在すると考えている。宗教の源泉となる存在を簡単に言えば、「神仏」あるいは、「人間を超えた貴いもの」、ということになるか。人間はそのような存在と直接コンタクトを取ることができぬがゆえに、神仏と人間の中を取り持つ媒介者を必要としてきた。いわゆる、教祖などの宗教指導者や教会、教団が神仏と人間の間で介在することによって、神仏の心に触れることができるという観念が存在してきた。しかし、「人間が神仏と直接交渉できない」という考え方は完全な誤解である。

仏教における、「顕教」<sup>けんぎょう</sup>、「密教」<sup>みつぎょう</sup>という概念を使って説明しよう。このような考え方は、いわゆる顕教（秘密にせず明らかに説かれた教え）の考え方であって、別の考え方も存在する。別の考え方は、顕教に対する密教（真理そのものの現れとしての大日如来によって示された、究極の教え）や秘教（秘伝的・奥義的な、選ばれた少数者だけの教え）における神仏観を意味する。

これらの教えは、秘密の修行を通じて修行者が直接的に神仏などの神聖なる存在と交渉可能であるというものだ。仏教で言えば、真言宗や天台宗が密教と呼ばれている。修験道も密教に属する宗派である。キリスト教で言えば、顕教のカトリックやプロテスタントに対して、グノーシスという教派が存在する（あるいは存在した）ようだ。

筆者は実質的には、「顕教」ではなく「密教」の修行者である。また、密教とはいってもその他の分類となる「雑密」<sup>ざつみつ</sup>、傾向としては「修験道」<sup>しゅげんどう</sup>に近い修行（簡単に言えば、自分の身体を使って何かを会得するという、体験第一主義である）を知らず知らずのうちにやってきたように思う。とは言うものの、筆者は修験道の専門家ではない。また、学生時代、例外的に新興宗教への入信体験はあるが、それとして修行というほどのものではない。あくまで、自分の心の姿勢として、密教的な方法を選択したということだ。

ここでいう「心の姿勢」とは、「隠されてきたものの中に、真実や真実へのアプローチ方法がないか？」という探求心を持っているという意味だ。隠されたものの中には勿論、霊の世界も含まれる。自身の心を、目に見えぬ霊の世界に向けた探求へと駆り立ててきたのだ。

このような修行を「霊修行」と呼ぶことがある。筆者の修行においては、常日頃相手にしているものは、眼に見えぬ存在であり、眼に見えない世界である。眼には見えず、声も聞けないが、確固たる活き物「神霊たち」が存在する。勿論「雑霊」や「悪霊」も存在する。この世の人間たちや動物たちも「生き霊」として存在する。ま



た、それらが活動する世界も存在する。「幽界」や「靈界」、「神界」という確固たる世界が存在する。この世界もまた「生き霊」（肉体を持った霊）達が活躍する一種の靈界である。筆者にとっては存在するもの全てが靈的存在なのである。

以上のような認識に従って生きてゆくこと、それが筆者の修行である。筆者はこの修行を四十年以上続けており、今も継続中である。筆者の生業はプログラマー（システム・エンジニア）、つまり、ソフトウェアのプログラミングに関わるものだ。還暦を過ぎた現在も現役プログラマーである。筆者にとっては、このプログラミングという仕事も修業の一環なのであり、毎日自身の魂をキーボードに向かって打ち込むというのが生活パターンとなっている。自身を形容すれば「二十一世紀の宮大工<sup>みやだいく</sup>」神と神の国のことばかり考えているソフト屋」である。そういう人間が一人ぐらいいてもよいのではないか……。

本書を書き始めた当初は、ただひたすら構想を練り、自分の考えを書き綴<sup>つづ</sup>っては捨て、また書いては改めるといった日々が続いていた。いわゆる「生みの苦しみ」である。

ところがどうだろう、途中から雰囲気が変わってきた。

「消えたイスラエル十支族問題（本書の第二部で詳述）」について論旨を展開している途中で、日本古代史側からのアプローチを行ってみた。「ユダヤ側からではなく日本古代史側から、消えたイスラエル十支族問題説明へのヒントが得られないか」と思ったのである。

前触れは「持統天皇霊の出現」である。百人一首の「春すぎて夏来<sup>なつき</sup>にけらし白妙<sup>しろたえ</sup>の衣<sup>ころも</sup>ほすてふ天<sup>あま</sup>の香具山<sup>かぐやま</sup>」の歌で知られる女帝だ。古代史に興味のない方からは、「持統天皇って何よそれ」というような反応が返ってきてきうだが、これは本当に起きたことだから仕方がない。

筆者がさんざん持統天皇と藤原不比等の悪口を書いたら、持統天皇本人の霊が接触してきたのだ。筆者はいわ

ゆる霊能者ではないが、一種の靈感知能力は備わっている。しかし、今回のような古代霊との遭遇体験は非常に珍しいことだ。また、そのような霊体験がしょっちゅうある訳ではない。あったとしてもせいぜい、数年に一回か二回程度のものだ。本書は筆者の処女作であるが、執筆中に色々な霊体験が起きるようになったのだ。

持統天皇霊の出現はほんの手始めであった。本書の第三部（第十四章「イエス・キリストとの対決」を参照）を執筆中のことだ。イエスやキリスト教の悪口を書いたら、今度はイエス霊が筆者に臨んだ。

だが、その前に別の体験があった。イエスが「天なる父」と呼んだ上位の神 $\parallel$ キリスト霊が降臨したのだ。イエスは個人であり、キリスト霊は二千年前に彼を地球に派遣した（？）大元の神である。詳細は後述する。「キリスト霊」という呼称であるが、キリスト教とは本来無関係な神霊である。その呼び方が正しいわけでもないので紛らわしいので「太陽神」と呼ぶことにする。

イエスからは「ゴルゴダの秘蹟（ $\parallel$ イエスがゴルゴダの丘で磔刑になった出来事を特にこのように呼ぶ）」の意味を教えられた。さらに太陽神は筆者の霊的な父である（らしい）ことが教えられた。

霊から教えられたり何か告げられたりというのは、文字通りではない。言葉のあやであり、実際には神霊との交流を通じて筆者が感得したことだ。それらの霊存在には確固とした実体が存在する。

また、太陽神は地球という惑星の事実上の最高神霊らしいことも分かってきた。

神さまに対して、最高とか二番目とか序列を付けようというのではない。それ以上の存在は筆者には分からないということではない。

筆者の認識では、この地球という惑星は多種多様な生命（可視、不可視を問わない）が複合した一個の生命体である。生命体には中心（ $\parallel$ 中枢）が存在する。その地球という複合多層生命体の中心存在が太陽神なのだ。さらに、この太陽神こそ日本の御親神、具体的には日本建国を主導された神格であることが分かってきた。

日本の最高神は太陽神であり、キリスト霊も太陽神であるから、両者は同一の存在に他ならない。太陽神が二千年前に地球に降下したことによって、人類の歴史は「全人類が平和裏に統合される」という結末に向けてスタートを切ったのである。

この事実は人類にとって極めて重大な発見である。人類がみな太陽神の子供、あるいは、太陽神の庇護下にあるということは、文字通り人類が世界一家の大家族となる可能性を意味しているからだ。

そのように認識した瞬間、従来の宗教という枠組が不要となってしまう。全ての人間が直接体験として、共通の親神を知ることになれば、人類の精神世界に究極の変革がもたらされる。筆者はゴルゴダの秘跡の意味「太陽神が日本建国を主導されたこと（本書の第三部、「第十四章 イエス・キリストとの対決」に詳述）を知り、世界一家のミロク世の当来が神の計画であることを理解したのである。

さて、ここからが本題である。先に述べた筆者のキリスト体験に先行して、大神呪「あじまりかん」との出会いがあった。「あじまりかん」は、山陰神道が戦後になって公開した不思議な呪文である。

「あじまりかん」を唱えると奇跡が起きると言われているが、その噂は真実であった。実を言えば、「あじまりかん」という呪言を毎日唱え続けた結果として、太陽神が降臨されたのである。

筆者はキリスト教やキリスト教会とは何故か相性が悪くて縁がなかったのだが、太陽神やイエス霊は、こちらが頼まなくても降臨されたのである（文句をさんざん言ったが……）。「こちらが頼まなくても」という表現は実態を正確には表していない。実は大神呪「あじまりかん」を唱えたことが呼び水Ⅱスイッチとなって、太陽神が来られたのだ。「あじまりかん」によって、筆者の中に私の神Ⅱ太陽神が降りられたのだ。

筆者はいわゆる霊能力者ではないので、霊の姿が見えたり声が聞こえたりするわけではない。しかし、最も基

本的な感覚である触感で霊の波動を感じることが多い。実際には肉体で感じているわけではないが、\*4皮膚感覚が身体の中と外に拡張したような感覚があり、その感覚で太陽神を感じたのである。その時には霊の正体が分からなくても、その時の状況を色々と思いつき返すことによって、後で正体が分かるということが多い。この太陽神との交流も後から分かったことである。

その時から現在に至るまで一年余りが経過したが、その間に今まで知りたかと思つてきた色々なことが分かってきた。何が分かったかと言えば、この星地球（特に日本）の神のことがはっきりと分かってきたのだ。次の通りである。

\*4 筆者の皮膚感覚の延長のような感覚は、神智学で「エーテル体」、ヨガでは「微細身みさいん」と呼ばれる目に見えない身体が持つ感覚である。このような能力は誰にでも備わっている基本的な感覚であると考えられる。この感覚は、誰もが持つている不可視の身体が保有している感知能力である。よって、誰でも不可視の身体に意識を向けることによって必要に応じて利用可能である。

## ● 歴史から日本の神々を特定する

### 《割愛》

## ● 第一部「玉手箱編」の概要

「一輪の秘密解明」という目的地に至る道のりとして、いささか脳天気な筆者「今浦島太郎」が今まで辿った、

心の旅路をかいつまんで紹介する。

人生のポイント・ポイントで、忘れられない出会いというものがある。

一人目は自称「太陽人」のお爺さん。名前は久世章成くぜあきなりだったという記憶がある。この人は「太陽から転生してきた」と自己紹介し、世の著名な教祖や神道家をまるで子供扱いする体の博識ていと観察眼の持ち主。とにかく、居ながらにして何でも分かる人であった。巷ちまたにはとんでもない霊覚者が存在するという好例である。

二人目は通称「龍宮の乙姫さま」。亀岡市の出雲大神宮の神巫女かんみこという肩書きの女性で、藤田妃見子ひみこと名乗っておられた。出口王仁三郎師の\*7霊界物語を「あんなもん支離滅裂しりめつれつで、読んだって何の足しにもならへん」とけなしながらも、王仁三郎師のことは大好きで、大本教のことやら、古代史のことやら、話題が豊富なこと。おまけに、人から預かった写真に手かざしして、遠隔治療で病気を治したり、運命を好転させたりという、陽気な霊能者だったが、既に故人である。

\*7 「霊界物語」の話題が出たので、霊界物語に関する優れたブログ作者「誠印」さんを紹介したい。

王仁三郎師の霊界物語に関しては、筆者も最初は乙姫さまのような捉え方をしていたが、最近はその考え方は正しくないことが分かってきた。実際に霊界物語を読んでもみると、神霊界側の事情や出来事が実に詳細に書かれており、非常に面白いのである。しかし筆者には、現時点では霊界物語の内容についてコメントするだけの力量はない。替わりに、「人に内在する良心神(神言念)」のホームページを紹介しておきたい。同ホームページにおいては、「誠印」さんという方が、詳細に大本神論から霊界物語をテキストとして、神の仕組を説明しておられる。その内容は極めて信頼できるものであることが分かってきた。興味のある方は参照されたい。誠印さんという方については、ここだけではなく、色々なところで登場していただくことになる。

筆者も若い頃は、紹介したような霊覚者や霊能者の間近で、様々の知識や経験に触れたものだ。話は脱線するが、学生時代に友人と二人で「\*8神仙の寵児ちようじ」の著者である笹目仙人（通称。ペンネームは笹目恒雄。会見当時五十歳代だったように思う。平成九年に九十四歳で亡くなる）のお宅に伺ったことがある。笹目氏は、若いころに蒙古で出口王仁三郎師と一緒に行動した思い出や、王仁三郎師から聞いたというちよつと色っぽい神さま話などを、懐かしそうに語ってくれた。まさに血湧き肉躍るといふ激動の人生を送ってこられた方から直接話が聞けたわけで、貴重なひと時であった。

\*8 筆者が学生時代（一九七四年）に読んだ本で、霞ヶ関書房から神仙の寵児、四巻本が出版された。夢中で読んだものだ。ある時、知人から紹介されたKという男に四巻セットで貸したが、遂に帰ってこなかった。残念であるが、諦めるとしよう。

第一巻 煉獄篇れんごく — 太陽を喰う男

第二巻 地恵篇かきせん — 鶴仙を御し崑崙山頂に立つ

第三巻 神秘編てんみつ — 神仙に導かれてモンゴル救済の旅

第四巻 天禄編てんろく — 流通無限の天理を開く

第一部の残りは「古代の宇宙人問題」、「古代史とどう付き合うか」、「精神世界の諸問題」といったテーマ群である。これらのテーマは、第二部以降の話題に入る前の準備的情報を提供する目的のものだ。

筆者の歴史認識では、古代から現在に至るまで、多様な宇宙人が地球に来ていたというのは、既定の事実である。CSのヒストリーチャンネルには「古代の宇宙人 (Ancient Aliens)」という専門番組があるぐらいポピュラーな学術領域でもある。日本は完全にその分野では出遅れているが……。

彼ら古代の宇宙人を指して「神々」と呼ぶことが多い。「彼らは本当の神ではない」というのが、筆者のスタンスだ。世界の大宗教成立の背景には、宇宙人の存在が大きな影響を与えていたことは、今後世界の常識となるであろう。

ただし彼らは、筆者の定義における神ではない。有限、かつ、相対的な存在であるだけでなく、彼らが行ってきたことと言えば、人間と大して変わらなかったり、人間以下だったりする存在だ。中には例外もいるが、多くがあまり立派な存在ではない。ただし、彼らの保有していた科学技術力は現在の人類をはるかに上回っていたから、彼らを人間の目から見た時に「神々である」と勘違いしただけのことである。

ゼカリア・シッチンの一連の著作によって、シュメールの神々やその出身地としての惑星「ニビル」が、かなりポピュラーな存在になった観がある。だが、シッチンの話には（おそらく意図的な）嘘も入っているので要注意である。

特に太陽系十二番惑星「ニビル」は怪しい。二人目、三人目の解説者が出てきてもよいはずなのに、出てこない。よって、「ニビル」は虚構だろう。また、（肉体を持った）神々を強調するあまり、本当の神の存在がぼやけてしまっている。「神々の年代記」を語り綴ったシッチンは、無神論者（別の言い方では唯物論者）のように見受けられる。真の神と密接に関係している仏陀やキリストの話は一切出て来ない（シッチンの専門は考古学だから当然なのかも知れないが…）。

よって、シッチンの説くシュメールの神々（ある面では我々人類以下の存在で、良いこともしているが、それ以上に悪いことを一杯している）を信じ過ぎるのは禁物である。

「歴史との付き合い方」というテーマでは、筆者の体験を通じて、「今までの教祖や霊能者が正しい古代史を語ったことは皆無である」ということを述べる。

大本教の出口王仁三郎師しかり、生長の家の谷口雅春師しかり、日月神示ひつきの岡本天明師しかり、である。今、正しい歴史を語りつつあるのは、宗教家ではなく歴史作家の関裕二氏である。

氏はさしずめ、古代史解明分野の名探偵・明智小五郎である。ちなみに、氏は第一部のテーマでもある「浦島太郎の秘密」を解き切った(?!?)作家だ。氏の著作群なくしては本シリーズも存在しない。それくらい重要な仕事を関氏は一人で(正確には、氏の著作の巻末に必ず名前が登場する梅澤恵美子氏と二人で)成し遂げつつある。筆者は秘かに「関・梅澤の両氏こそ、失われた日本古代史を日本国民に取り戻してくれる神さまではないか」と勘ぐっているくらいだ。彼らの仕事は国民栄誉賞百個分に値する。

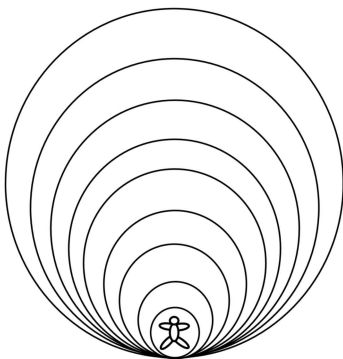
氏が彼の著作群で語る古代日本史が、大筋で新しい古代日本正史として定着するはずである。

筆者は関裕二史観に何とかキャッチアップしようと鋭意努力中の身であり、最近ようやく、日本書紀や古事記の原文を読むようになった。古事記や日本書紀の面白さが少し分かりかけてきた段階だ。

## ● 第二部 「生命樹編」 の概要

日本古代史に関しては、筆者独自の次のような霊的観点が存在する。

- 1 この宇宙は、複数の見えない世界と物質世界が、多層的に重なり合った状態で存在する。山陰神道伝承の九天の図くというものが、それが前述の「重なり合った状態」をうまく表現して



九天の図 (一人の人物に九個の天、すなわち、見えない世界が重なり合って存在している様子が、うまく現されている)



いる。この図は素晴らしいと思う。

2 目に見えない世界が元になって、この物質世界ができあがっている。目に見えない世界の方が目に見える世界よりもずっとずっと大きい。

3 人間は霊であり、目に見えない世界と交流することができる。また、目に見えない世界の存在を感知することができる。歴史も\*9虚空蔵知識として虚空（空間）に貯蔵されており、必要に応じてアクセス可能であると考える。虚空について補足する。虚空とは実は空間そのものである。山陰神道「九天の図」中の全ての次元の重なり合った空間である。

\*9 人智学者ルドルフ・シュタイナーは、虚空蔵知識を「アカシヤ年代記」と呼んだ。仏教では虚空蔵菩薩（アカーシヤ・ガルバ）がよく知られたほけ様である。虚空蔵菩薩はアカシヤ年代記の化身のような存在である。空海が行じたことで知られる「虚空蔵求聞持法」が記憶能力を開発する修法であるかのように語られることが多い。しかし、それは嘘であり、その種のことを語るといことで、自身が虚空蔵求聞持法を修行していないことを暴露している。虚空蔵求聞持法を文字通り解釈すれば、虚空蔵データベースに自在にアクセスする能力を得るための修法であることは明白である。ちなみに筆者には空海のような虚空蔵知識獲得能力は備わっていないが、必要なことに関してはごく希に、一種の一体化の感覚によって虚空蔵より感知することがあるようだ。亜空間、超空間や虚空蔵知識の実在性に関しては、割と近い将来に新しい物理学によって明らかにすることが期待される。新しい物理学とは現在の量子力学の延長線上に存在しており、既に具体的な成果が出始めているが、本書の範囲を越えるため詳細は割愛する。

以上のような世界観を前提とした上で、ひたすら古代史文献を読むというものだ。もちろん、霊能力で古代史を読むといったことではない。私はその種の霊能力は一切持ち合わせていない。代わりに、目に見えぬ神霊の世界からの人類史への働きかけについて考察するという論理的アプローチ方法を採用している。

第二部「生命樹編」は、基本は現実の歴史Ⅱ日本古代史（特に日本建国史）に添いながらも、\*10イスラエル人の日本来訪問問題も合わせて考えようというストーリーである。

\*10 本書内では「ユダヤ人」という呼び方ではなく、「イスラエル人」という呼び方をできるだけ使うようにしている。その理由は、特に日本では「ユダヤ人」という言葉にまつわる悪いイメージ、例えば「ユダヤの陰謀」とか「ユダヤの世界支配戦略」などというプロパガンダがメディアの世界を賑わせており、無用な誤解を避けたかったからである。実際のところ、筆者にはユダヤに対する好悪の感情はなく、日本人として公平な立場で彼らの歴史を学ぼうと努めているだけである。

最近、筆者が若い頃に見た「自分が神のような存在と格闘した」夢の意味が解けたので、「イスラエル」という表現を意図的に使うようになった。筆者の夢は、夜明けまで神Ⅱ主と闘って負けなかったヤコブが、主からもらった名前が「イスラエル」だったという、旧約聖書のモチーフ（創世記第三章二八）であることが分かったからだ。本書では、「イスラエルⅡ神に打ち勝つ／神と闘う」というテーマに関する記述が度々登場する。不思議で仕方がないのは、自分が旧約聖書に登場するヤコブの体験さながらの夢を見たということだ。ひよつとしたら自分もイスラエル系の魂なのかも知れないと思うことがある。

「歴史への神の介入」というテーマは、筆者が学生時代に「経綸狂い」の友人Mから吹き込まれた着想である。友人Mの「経綸狂い」とは、いわゆる「\*11神の経綸」に取り憑かれるという、かなり困った病気である。勿論、この病気は医者には治せる類のものではない。

\*11 「神の経綸」とは何かを簡単に言えば、人類の歴史は神の定めた道筋（＝タイム・チャート、シナリオ）に従って進んでゆくという考え方である。問題は、神の定めたタイム・チャートをどうやって読み取るかということだが、そのためにはひたすら歴史を読むしかないというのが、筆者の立場である。「歴史を読む」という行為は、日本や世界の歴史資料を読むということであるし、聖書を読んだり、古事記や日本書紀を読んだりということも含まれる。勿論、好きな歴史作家の著作を読むことも「歴史を読む」行為となる。

歴史の背後に、見えざる神の手の動きを感じることもある。「見えざる神の手」と言っても抽象的なものではない。正史とされる日本書紀や、偽書の可能性があると言われる古事記を読んでも、特に目を引く魅力的な人物が存在する。本シリーズで取り上げるアメノヒボコや神功皇后は、鮮やかな光芒を放つ魅力的な存在である。このような魅力的な人物の働きを通じて神の経綸が展開する、というのが筆者の歴史理解の基本となっている。

何故彼らが特別なのかと言えば、彼らは「神の化身」（のような存在）だからである。史学会では実在性すら疑われているにもかかわらず、日本書紀や古事記に取り上げられているアメノヒボコと神功皇后は間違いなく実在の人間であり、日本建国は彼らの存在を抜きにしては起こり得なかったというのが、筆者の見解である。

「経綸狂い」の症状について少しお話しすると、例えば系図というものに対する尋常ならざる執着である。具体的には、旧約聖書に書かれたユダヤの王や預言者の系譜けいふ、古事記に出てくる日本の天皇の系図などが対象となる。とにかく、年代順に王や天皇を並べて、一代目、二代目、……と、番号を振って、二種類の系譜に関連性がないか、あるいは、共通のパターンがないか、などという分析を行うのだ。初めて聞いた時は圧倒されたものだが、しばらく時間が経つと「何だこの発想は？ 着いて行けないな。旧約聖書と古事記の間に一体何の関係があるんだ……」などと思ったものだ。

ところが、友人の病気はいつの間にか筆者にも伝染していったらしい。筆者の着想は、\*12 ユダヤの系譜と日本の

天皇の系譜が一つにつながっているかも知れない」というものだ。

\*12 この種の発想に基づく論説を「日ユ同祖論」と呼ぶことがある。筆者は、この「日ユ同祖論」という表現があまり

好きではない。その理由は、巷間に出回っている日ユ同祖論的言説は、いずれも「ユダヤが原点」とか「ユダヤがすごい」的なものが目立ち過ぎており、虚実ないまぜのものが多いからだ。ユダヤ人ではなく日本人の著作にその傾向が強い。また、旧約聖書を拾い読みしたが、読んでみて「ユダヤは素晴らしい」などと間違っても言えないことが明らかだったからだ。ユダヤには学ぶべき良いところも多々あるが、あんまり尊敬できないところも多いのだ。ユダヤの神もしかり。ユダヤの神は、血なまぐさい。ここで長々と述べても仕方がないので一点だけ言っておこう。筆者にとつては「殺し過ぎ」が大問題である。一神教を信奉する人たちからは「お前は何も分かっていない」と言われそうだが、多神教を信じるお人好しの日本人の一人としては、「他民族の聖絶を命じる神に従うことが正しいのか？」という反論を返したい。「神は愛なり」という警句があるが、残念なことに旧約聖書の神は必ずしも愛の神ではなかったと思う。「聖絶」という出来事は、少なくとも筆者にとつては、同意できかねる悪行である。

このアイデアを実証するには、一つの大きな難関が存在する。難関とは、「少なくとも日本の古代史が確定している必要がある」という要請である。「日本古代史の確定」とは、日本建国史を確定する必要があるという意味である。また、その過程で関係者たちに影響を及ぼした神を特定しようという筆者の試論が伴う。

何故神を特定しなければならないのか？！

それは、**日本神道**という宗教の特性が、「**神を明らかにするためではなく、神を隠すために、歴史上のある時点で意図的に作られた**」というものだからだ（第二部「第七章 創られた日本の神々を消去せよ！」を参照）。よって、どの時点で日本の神が隠蔽されたかが分かれば、自動的に隠されていた神も明らかにする。その時点で明らかになった神こそ、隠された神であり、日本の本当の神だからである。隠された神を表に出すということが本書

の大きな目的であることを、頭の片隅に置いていただきたい。

さて、本書で筆者が語ろうとするイスラエル人とは、「消えたイスラエル十支族」のことである。彼らと日本の歴史をつなげようにも、結び目として存在したはずの人物を特定しなければならぬ。その点をクリアしない限り、筆者のアイデアは空中分解してしまうからだ。日本の天皇家成立時点に遡って、最初の大王、あるいは、その先祖を、歴史的にイスラエルとの繋がりにおいて特定しなければ意味がない。

古代のイスラエル人の中の一部が極東の日本にやってきたということは、そもそもあり得る話なのであるうか？

結論から言えば、まず間違いなく彼らの一部は日本にやってきている。それも\*13 一番筋のいい人たちが日本入りしているはずだ。ディアスポラで世界中に散らされ、新天地を求め旅の中で鍛えに鍛えられたイスラエル人の一部が、間違いなく極東の日本に到達しているはずだ。

\*13 大本教の出口王仁三郎師は生前、「イスラエルの十二の氏族は選ばれたのや。一番いいのが日本へ来てゐるので日本民族や」と発言している。歴史作家の関裕二氏は「お人好しで戦いに弱く、争いに敗れ追い出されてきた人間が、最後にたどり着いたのが日本列島」ということを、最近の著作「なぜ日本と朝鮮半島は仲が悪いのか（PHP研究所、二〇一五）」で語る。筆者はどちらの見解も表現が異なるだけであり、同じことを言っていると思う。ただし、関氏の見解はユダヤ人に関するものではなく、縄文末期から弥生時代、飛鳥・奈良時代にかけて日本に入ってきた人々に対するものである。

倭人としてひとくくりに語られる人々のうち、「海人族」と呼ばれる人たち、すなわち、安曇氏、宗像氏、住吉系の人々が最有力候補となる。彼らは海のシルクロード経由（南回り）で極東に辿り着いている。ただし、筆者

のこの考えには確かな資料の裏付けはないが、状況証拠は存在する（補足…第二部第八章の「事例1…高松塚古墳被葬者の謎」を参照）。

さらに陸のシルクロード（北回りと南回りの両方）經由で極東の日本列島を終着点とした人々もいる。見かけ上は朝鮮半島や中国大陸經由であるが、実際にはシルクロード經由で日本までやってきているのだ。

彼らは系譜的にはイスラエル人だが、世代を継いだ旅程の途上で、様々な文化や風習、技術を身につけただけではなく、最後は日本人になったのだ。お人好しばかりが吹き溜まった島国、日本列島の住人になったのだ。

以上に述べたような意味合いで、イスラエル史と日本史は確実に接続しているはずである。

筆者は本書を書く途上で、古代イスラエルの歴史が筆者の（霊的な）体内に風のように吹き込んでくるという、珍しい体験を持った。

日本には、霊的な意味で、全オリエント史が溶け込んでいるのだ。筆者は、吹き溜まりの国Ⅱ日本ならではの霊的内実を「生命樹」として感得した。全オリエント史を生命樹として認識する体験を持ったわけだが、筆者は今まで、誰かがこのような体験を持ったという報告を聞いたことがない。

古代イスラエル人にとって日本列島とは、「ここまで来ればもうひどい目に会うことはない」という、最後の聖域だったのではないか。その聖域の成り立ちと有りさまの霊的内実を、筆者は生命樹として感受したのではなかったかと思うのである。

吹き溜まり国Ⅱ日本は、世界で一番優しい国なのだと思う（嫌なところも一杯あると思うが…）。他の国々の人からは「甘ちゃん国家」と思われていることだろう。でも、その「甘ちゃん」ぶり、お人好しぶりが、これから世界にとって、最後の生き残り方法の提案になるような気がしてならない。

## ● 第三部「弥勒編」の概要

本シリーズの最終巻は、漢字文化圏で「弥勒（みろく）」と呼ばれる存在をテーマとしている。これから現れるとされる救世主Ⅱメシアの日本の表現が「弥勒」であると考えている。

救世主がテーマなので、旧約聖書のメシア、キリスト、そしてそれらの概念の歴史的発生源であるユダヤⅡイスラエルの民を意識せざるを得なかった。

M・トケイヤー師の「ユダヤと日本―謎の古代史（産業能率大学出版部）」は素晴らしい著作である。この本の初版を書いた時点では、たくさんあるユダヤ本の一つとしてしか見えていなかったのだが、読み返してみると著者の誠実さや公平さだけでなく、人柄のようなものが伝わってきて、師の存在を通じて、イスラエルの民への深い共感を覚えるようになった。

そして同時に、自身の魂の中にイスラエル人が存在することが分かったのである。これは自分にとっては驚くべき回心の体験である。トケイヤー師の著作を通じて、イスラエルの魂とでもいべき霊的実体（「イスラエルの国魂」である）につながってしまったのだ。師の著作には三笠宮との交友について書かれていたが、内面的ユダヤ人であったとされる三笠宮の心情が分かるようになったのだ。この体験によって、ユダヤⅡイスラエルを客体として自分の外側に見るのではなく、自分がイスラエルそのものであるという自覚が生じたのである。

筆者は生粋の日本人であると自分で思い込んでいたのだが、どうも違っていたらしい。日本には、筆者のような霊的な突然変異体——自分が内面的にはイスラエル人であるという自覚を持った人間のこと——が存在する。何が言いたいのかというと、失われた十支族が日本にやってきたというのは、筆者自身が霊的な意味での証拠であるということだ。

ここまでの霊的体験を重ねたことにより、ようやくこの本の存在意義が明らかになってきた。この時点で筆者はようやく、外なるイスラエル人達ひとに向けての提案のようなものが可能になったと感じるのである。

現在のイスラエル国が世界にとって大いに役立つことが可能な、重要な役回りが存在する。それは、ご先祖の一部が日本に行ったことを学術的に証明することである（外形的な証拠がないため、なかなかはかどっていない様子であるが…）。

自分たちのご先祖が日本人となって、「和なるを以て貴しとなす」というお人好しひとよ原理を受け入れただけでなく、積極的に自身が生きてゆくための根本原理として遵守するようになったことを、イスラエル国として公言すればよいのだ。そして、「イスラエル国も日本流のお人好し原理を奉ずる」ことを宣言すべきなのだ。「お人好しこそ世界を救う原理」だからである。イスラエル国にはラビ・M・トケイヤー師のような義の人がおられるに違いない。是非とも本書の提案に耳を傾けてほしい。そして、公的おおな場なで兄弟の名乗りを上げていただきたい。

**神の経綸**とは、「日本を地球最後の聖地として残しておく」という物語である。第三部を貫くテーマは、神の経綸の最終段階に登場するとされる「**弥勒**」である。イスラエル十支族問題について長々と述べたのは、イスラエルが救世主「弥勒」という存在の本質に関わっていると考えられるからだ。

「弥勒」とは救世主メシヤの東洋的な呼び方であるが、そのとらえ方は人それぞれであり、色々な定義が存在してよいと思う。

仏教的なとらえ方としては、弥勒は釈迦なき後の世界に出現する未来仏であることになっている。弥勒下生経というお経には、何でも五十六億七千万年後に、それまで生まれ変わり死に変わりを続けながら、長い長い間菩薩修行をしていた弥勒が仏陀となる話が書かれている。

ただ、禅の無門関という講釈書には、「世尊拈華」という公案が記載されている。禅宗の始祖とされる摩訶迦葉まかかしやう



の話である。

摩訶迦葉は、釈迦の説法中の「拈華（「会衆の前で手に持った花一輪を拈ひねって見せた行為」）に對して、「微笑ほほえみ」を返したという。摩訶迦葉が微笑んだのは、「釈迦の法の神髓しんすいを会得しているのは自分だ」というアピールに他ならない。つまり、釈迦の衣鉢いはつを継承したのは摩訶迦葉だということになる。ということは、禪宗のエッセンスが残っている日本に、摩訶迦葉から継承した釈迦の教えの神髓が伝わっているということだ。

学生時代に、生長の家の教祖、谷口雅春師の「無門闍解釈」に書かれたこの話を讀んだ時、理由もなく「自分はこの拈華微笑ほうの法（＝仏の教え）を知っている」と思ったものだ。

これらの話はすべて釈迦が説いたオリジナルの仏教ではなく、西暦紀元前後に龍樹りゆうじゆや世親せしんら（または中国の仏典作者）によって創作された、大乘仏教と呼ばれる一群の教説や中国で創られた經典群に含まれるものであることが分かっていく。釈迦のオリジナルの教えでは救われる人が少なかったため、広く一般向けに釈迦の教えを再創作したのであろう。仏教史的には釈迦本人の教えではなくても、人々に希望を与える良い教えであれば、十分に意味がある。

谷口師の本に書かれた内容は「国家生命体論」とでもいうべきものだ。その意味は、「日本という国家の形かたち（「国体」という。国民体育大会ではない）は神が定めたもので、天皇を中心とする「中心帰一の原理」によって国が成立している」というものだ。日本という国を樹に喩える時、天皇が幹で国民は枝葉である。そのような樹の姿が日本の国の在り方なのだ。

ところが、表面的に日本という国を見る限りでは、現在の日本の国の姿が神の国そのものだとは全く思えない。確かに天皇という国民統合の象徴は存在する。だから、何となく「日本は中心帰一の国なのかな」とは思うが、そこまでである。どこをどう見ても、現在の日本が神の国の姿を十分に現しているとは思えない。

絶対に今の日本はおかしい！

今の世界もおかしい！

筆者がそのように感じる根本原因は、自身の中に存在する。私の感覚では、「神の国」は今ここに存在する。私の中では既に「神の国」が成就しているのだ。「神国日本」は今ここに存在する。それを貴方に見せてあげることができないのが実にもどかしい。こんなことを言うと言わんと筆者が国粹主義者だと思われるかも知れないが、それは違う。筆者は本書の執筆過程で見たものをそのまま語っているものであり、特定の愛国主義には影響されていないからである。

それが実際に起きるのは、これから少し先のことなのだ。神の国がこの世に姿を現すのは、もう少し時間がかかるだけのことなのだ。

自称「今浦島太郎」の筆者は、龍宮城に行つて現界に帰ってきた男である。不思議なことに、かつて浦島太郎が持ち帰った玉手箱はいまここにある（あくまでも霊的な存在であり、物質の玉手箱は持っていない。念のため）。

### ●浦島太郎の玉手箱は契約の箱である！

ふと気が付いたのだが、浦島太郎がもらった玉手箱は、モーゼの「<sup>\*14</sup>契約の箱（アーク、聖櫃）」に似ている。契約の箱が日本的な形となって童話の中に残されていたということではないのか。

<sup>\*14</sup> 契約の箱について色々と調べてみると、実物は非常に危険な殺傷能力を有する人工知能付きの通信機であったようだ。実物は今後もずっと出てきてほしくはないというのが、筆者の正直な意見である。ここでは、浦島太郎がもらった玉手箱とモーゼの契約の箱に、「神聖な知識や永遠の生命」という共通のコンセプトが見られることに着目した

ということにとどめ、これ以上深入りしない。

秘密の知識は童話や神話、喩え話という形をとって、世界中の国々に残っている。浦島太郎の童話は、「神の国が現実になる時が至っていない」という、残念な結末であった。

だが、その時は今なのだ。

そして、契約の箱（＝玉手箱）の中身は筆者の魂の中に存在する。契約の箱の中身は神そのものである。さらに、契約の箱には契約の地＝神の国（理屈っぽく言えば「神の国の設計図」）が入っていたのだ。

これから姿を現す本当の日本、神の国としての日本が玉手箱の中に詰まっていた。そしてそれは今ここにある！ 私が神の国を携えている。

貴方も筆者と同じもの、神と神の国、を今すぐに獲得できる。その方法は、筆者の提唱する「世界神道」における唯一の呪言「あじまりかん」を唱えることである。

どうしてそんなことが可能になるのか。

それは、**大神呪「あじまりかん」**が**神を呼び出すスイッチ**だからだ。「あじまりかん」というスイッチを押すだけで、神と神の国が貴方の中に降りてくる。神を見ることが出来る、極めて簡単なことだったのだ。これからは、人類一人一人が直接、神を呼び、神と話し、自身が神の息子であり娘であることを知ることが可能となる。筆者がここに書いていることを全て自身の体験として知ることが出来る。イエスだけが神の子ではないのだ。貴方も貴女も等しく神の子であり、兄弟姉妹なのだ。○○教会や□□教にすぎる必要もなくなる。ただ、「あじまりかん」というスイッチを押すだけでよい。誰でも可能である。

これは筆者が身をもって体験したことだから言えるのである。

この体験を報告しているのは、今のところ筆者以外には、『日本とはどんな国』（たま出版、一九七九年）の著者、佐藤定吉博士のみである。「あじまりかん」を唱えてきた人たちは私たちだけではないのに、どうして私たちだけに起きたのか。そのことが本書の初版を書いた時以来大きな謎だったが、実際には謎でも何でもなかった分かった。

「あじまりかん」を唱える人の求めに忘れて、神、すなわち、何か素晴らしいものが降りてくるのである。神と神の国を求める人（佐藤博士と筆者）には、神と神の国そのものが降りてきた。それだけのことだったのである。

だから、ただ漫然と「あじまりかん」を唱えるのではなく、自分が求めているものは何かを自問していただきたい。その人の求めに応じて、「あじまりかん」は結果をもたらしてくれるはずだ。

言ってしまうえば、「あじまりかん」は神を召喚する呪文なのだ。神を召喚した結果として何がもたらされるかは、貴方次第である。

次のことは最低保障できる。

「あじまりかん」を唱えると、そこに神が降臨する。

簡単すぎて、ピンと来ない方がおられるかも知れない。唱えるも自由、唱えないも自由だ。しかし、神という究極の存在を手に入れる呪文があるというのに、唱えないというのはあまりにももったいないことだ。唱えるしかない！

筆者が提唱する「世界神道」には、次に掲げる、ただ一つの行法がある。

「あじまりかん」を唱えよ。

筆者は、「あじまりかん」の福音ふくいんを伝える「あじまりかん主ぬし（自称）」である。今はまだ目に見えぬ、神と神の国を携える者だ。

貴方も「あじまりかん」の修行者となつて、神を自分のものにするがよい。そのような修行者がたくさん現れる時、神の国はいよいよ、この地上世界に、その具体的な姿を顕在化させることになる。

本書の主旨や論点については、この序文でダイジェストとして紹介したつもりだ。筆者一個人の体験や智見であるとは言え、ガイドマップがなければ消化不良を起しかねないと思つての配慮である。以降は謎解きのプロセスをじっくり楽しんでいただければ幸いである。

あまた 数多のあじまりかん行者よ、出でよ。

あじまりかん行者たちよ、集え。

そして、この地上に神の国を打ち立てよ。

二〇一七年七月吉日

あじまりかん主ぬし 斎藤 敏一

# 第一部 はじめに

## 浦島太郎の唄

一、昔昔、浦島は助けた亀に連れられて、龍宮城へ来て見れば、絵にもかけない美しき。

二、乙姫様の御馳走に、鯛や比目魚の舞い踊り、ただ珍しくおもしろく、月日のたつのも夢の中。

三、遊びにあきて気がついて、お暇乞いもそこそこに、帰る途中の楽しみは、土産に貰った玉手箱。

四、帰って見れば、こは如何に、元居た家も村も無く、路に行きあう人々は、顔も知らない者ばかり。

五、心細さに蓋とれば、あけて悔しき玉手箱、中からはつと白煙、たちまち太郎はお爺さん。

みなさんご存じの浦島太郎の歌詞である。ただし、多くの方は一番、二番までくらいしか知らないのではない



ご存じ、浦島太郎のイメージ

だろうか。一番から五番までを通して読めば、浦島太郎のおなじみの物語全体が再現される。

ところで、この浦島太郎の物語の結末であるが、太郎の立場から見ると、随分理不尽な結末である。これでは、浦島太郎が可哀想すぎる。見たところ、浦島太郎は龍宮城に少し長居しすぎただけであって、特に悪いことをした様子はない。それなのに、故郷に帰ったら誰も見知った人がいなくなっており、ただ悲しくて寂しくて玉手箱を開けたら白い煙が出てきて、お爺さんになってしまったという。これでは太郎は救われないではないか。亀を助けたという最初の善行にもかかわらず、最後に玉手箱を開いたらお爺さんになったという落ちちはひどすぎるのではないか。

参考までに、お笑いのバカリズムのYouTube動画「浦島太郎問題」をご覧いただきたい。筆者は、お笑いという要素を取っ払って、バカリズムの意見に全面的に賛同するものである。久しぶりにお笑いの動画を見て大笑いしてしまった。

ここからは真面目な話である。この浦島太郎のお伽話は、確かに不条理に満ちた物語になっている。古代の人びとは、浦島太郎が実在した人物であると考えていたようで、日本書紀をはじめ、丹後国風土記、万葉集、御伽草子などに記録されている。参考までに、日本書紀「雄略紀」の雄略天皇廿年（477年）秋七月の条には……、

秋七月に、丹波国余社郡の管川の人、端江浦島子、舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。便に女に化爲る。是に、浦島子、感りて婦にす。相遂ひて海に入る。蓬莱山に到りて、仙衆を歴り観る。語は、別巻に在り。

詳細は「別巻に在り」と書かれているが、別巻は現存しない。丹後国風土記や万葉集に、より詳細な物語が書かれている。どうも、浦島太郎については各資料とも「黙ってはいられない」といった感じで、多弁になってい

たようである。

この浦島太郎にはモデルとなった人物がおり、その人物に関して正史である日本書紀には正しく書かれていないため、伝承やお伽話の形式で人々が真実の一片を語り継ごうとしたらしい。

浦島太郎のモデルとなった人物とは「アメノヒボコ」であるということをも、解明してしまった人がいる。歴史作家の関裕二氏である。氏は「日本古代史の秘密はあらかた解き明かしてしまった」と豪語する。筆者は、氏の著作をすべて読んでいるが、彼の発言は大袈裟ではなく、彼が本当に日本古代史を解き明かしてしまったと認識している。つまり、関裕二氏の古代史ワールドでは、既に日本古代史が確定してしまったか、日本古代史の確定が目前であるという意味である。浦島太郎については、そのものズバリの著作『浦島太郎は誰なのか』（KKベストセラーズ、2007年）や、『アメノヒボコ、謎の真相』（河出書房新社、2014年）が存在する。興味のある方は、それらの著作にあたりたい。

本書はそのタイトルからも分かるように、日本古代史の謎だけではなく、日本古代史と精神世界の関連性を明かそうとするものである。日本古代史と精神世界が関連している理由は、霊の世界・神の世界と古代史の世界が繋がっているからである。

筆者は既に還暦を迎えており、学生時代から四十年以上も神の探求を続けてきた。勿論、長期間やってきたからエライ、とかいう意味ではなく、物事の探求には非常に長い時間を要するケースもあるという意味である。

神の探求は、一般的には宗教的な求道を通じて行うものだという通念があるが、筆者の場合は少し違っていた。宗教もさんざんやったが、そこには自分が求める神はいなかったのである。主に学生時代に宗教遍歴を行ったのだが、そこには筆者の求めている神はおられないことが分かった。

だから、探求の方向性を変えた。筆者の新たな探求の鋒先ほしなみが日本古代史の世界だったということだ。



プログラマーという職のかたわら、神を探すために筆者が行ってきたことは、日本古代史を学ぶということだけであった。これには三十年という長い時間がかかった。三十年もかかったのは、アミノヒボコに関連した考古学的発見に時間がかかったため、関裕二氏が解明し終えたのが最近のことであるということではしかない。この事実は筆者個人としては、内心ちよつと情けない話なのだが、本当のことだから仕方がない。関裕二氏による日本建国に絡む古代史解明がなければ、筆者の著作も存在しないからである。

筆者の最大の関心事は「日本の神の正体」である。日本の神探求の詳細は、本書と同時にリリースされる第二部の「生命樹編」に譲る。第一部である本書は、筆者が発見した「生命の樹」——日本の神の正体も同時に分かる——に至る道筋や背景を明らかにしようとするものである。重要なのは発見に至るまでのプロセスなのであり、プロセスを抜きにしては真実を語るができないというのが筆者の信条である。「プロセス抜きで一氣に結論を」と行きたいところであるが、魂の問題は百千万言の文章を連ねても表現し切れるものではない。色々と補足情報が必要になるのだ。そのため、いささか冗長に見えるのではあるが、できる限り探求のプロセスも伝えたいと思つてのことである。その種の情報を必要としている人も少なくないと考えるからだ。

本書の最初のタイトルは『世界神道入門』であった。だが、入門という言葉に反して、内容は決して易しくはない。これは「真実を探求する精神の旅は結構ハードである」という事実に由来する。また、真実とは魂の世界に属することからであり、眼には見えない。よって、伝えることが非常に困難であるという問題も横たわる。ただし、筆者は既に最終回答(?! )を得てしまったので、公開するしかないと判断した次第である。

筆者は、自分が浦島太郎の再来であると考えている。その理由は「ウラシマ」というキーワードに込められている。ウラとは「裏」であり、シマとは「日本の歴史」を意味している。筆者の自称「浦島太郎」であるが、「裏」は裏側、「島」は日本列島、「太郎」は単に長男の意味である。龍宮城(神の宝物がある場所)に秘められた宝物

(本書の中身)を発見した男であるという意味である。筆者は齢を重ねたが、龍宮へ行き、宝物を発見し、それを携えて無事に戻ってきた。今回は玉手箱を開いても煙が出たりしない。その宝物は誰にでも見せることができる(見せ方は非常に難しいが……)。よって、このような文章などを認めている次第……。

「第一部 玉手箱編」は三部作の導入的役割を果たすものであり、筆者のメッセージの核心部は第二部、第三部に譲らざるを得ない。何しろ魂(こころ)で感じるしかない世界のことを伝えようとしているので、どうしてもページ数が増えてしまうのである。その点はお許しいただきたい。

いぎ、龍宮城へ!

誰も見たことがない宝物を見つげに……

## 第二部 はじめに

事の初めは執筆開始時点から一年ほど前（二〇一三年の秋ごろ）のことである。

日本古代史が好きな筆者は、前から気になっていた日本とユダヤとの関連について調べてみたくなった。たまに、自分が以前に購入していた久保有政氏の「日本の中のユダヤ文化」や「神道の中のユダヤ文化」、篠原史憲氏の「天皇家とユダヤ人」、小石豊氏の「聖書に預言された神国日本」などを読み始めた。

改めて読み返してみると引き込まれ、「ユダヤ」とか「消えたイスラエル十支族」をテーマにした本を購入、立て続けに二十冊ぐらい読んだ。

消えたイスラエル十支族が昔日本にやってきたかどうか始まり、いわゆる「日ユ同祖論」といわれるテーマは、オリエント史の東西の繋がりを検証するという意味で、とても興味深いものであった。古代オリエント史の裏側が分かったような気持ちになり、知的な満足感があるからだ。

だが、確実な考古学的証拠があるかと言えば、現時点では何一つ見つからない。どの本にも、確実な証拠と言えるものは書かれてはいなかった。

ただし、状況証拠と言えるものは数多く紹介されており、心証としては「ユダヤ人はやってきた」と言えそう。最終回答は見えないまま、以下の仮定の元に話を進めよう。私の現時点で出せる見解としてはこうである。

イスラエル十支族は日本にやってきた。そして彼らは正体を消して日本人になった。

実際にユダヤ人が古代に日本にやってきたかどうかは別にして、今回のユダヤに関する学びでは一定の成果があった。それは、「ユダヤ（イスラエル）の人々は子供の頃から自身の歴史を学んでいる」ということを確認できたことだ。また、小さい頃から自分たちの歴史を学べるユダヤ人をうらやましく思った。M・トケイヤー師が語る、ユダヤ人の自国の歴史を大切にする姿勢に日本人もあやかりたいものだ、心に期するものがあった。

この種の話には何故か不確定性がつきまとい、なかなか確信にまでは至らない。ふと冷静になると「種明かし前のミステリー小説と同じで、状況証拠と呼べるものはあっても確実な証拠は皆無である」ことに気付き、確信が薄れてしまう。そういう日々が続いた。

「それでは、自分なりに確実な証拠を探せばよいのではないか」と思い、アプローチの仕方を変えてみた。もともと好きで長年読んできた日本古代史関連の本を読み返すことで、何かユダヤ関連の証拠が見つかるのではないかと思ったのである。

ところが、日本古代史関連の本をいくら読んでも、ユダヤの線からは外れていってしまうのだ。考えてみればこれは当然であった。日本古代史の本は「古代の日本に何があったかを追求している」のであり、ユダヤと日本の関係を追求する目的で書かれている訳ではない。だから、それらの本の中にユダヤ関連の直接的情報を求めることが、そもそも間違いだったのである。

古代ユダヤ人の日本への旅を調査する過程で予想外の体験をしたのだ。何故予想外だったかという点、分かったのは古代ユダヤ人のことではなく、私たちが住むこの日本という国のことだったからだ。この日本国が、神の計画として建国されたことが明確に分かったのだ。毎日調べものをして疲れ切り、ぐったりして目を閉じていた時、突然何かが自分の中に入ってきた。その何かとは、日本という国の設計図とも言うべき概念であった。

いきなり「神の計画」という言葉が飛び出して、人によっては、やぶから棒と受けとられるかも知れない。筆

者のもっぱらの興味は、私たち人類の歴史に神||人間を超えた存在が実際に関わっているのかどうかということ、そして、神が人類の歴史に関わっているとしたら具体的にどのようなように関わっているのか、ということだ。

結論を先に言っておこう。それはどこかの誰かが言ってきたことであり、私自身も昔からそのような説は聞いていた内容なのだ。日本は世界の中心の国なのである。重要なのは、そのように神が設計したということだ。

本書では、その設計図をお目にかけてようと思う。「設計図」とは言っても、それはあくまでも比喻である。筆者が見たのは実際のところ「地球という生命体の骨格となるコンセプト||存在原理」である。

「初めに設計図があった」のである。

本書の執筆過程で、筆者は人類の歴史を「世界樹」、或いは「生命樹」として認識する体験を持ったのだが、その前触れとして古代イスラエルからの（霊的な）風が吹いてきたのである。その不思議な風に誘われて、探求を続けてきた結果として、日本古代史と古代ユグヤ史とが自分の中で統合されるという霊的体験を持った。今回の場合、色々調べ物をしてゆくと、ポイント、ポイントで霊的な啓示があり、その啓示によって本書の執筆が進んでいった。その結果、今までどんな本を読んでも分からなかった歴史の謎が解けたのだ。

日本古代史も人類の未来も、とにかく面白いことになっていることだけは間違いない。この先、決して暗いことはないのです、まずは安心されたい。そして、最後まで拙論におつきあい願えれば、筆者としてこれ以上の幸せはない。

## 第三部 はじめに

本シリーズ第二部では、日本建国史確定化の試論、日本の実体を伴わない神々を消し去ること、消えたイスラエル十支族問題に対する考えなどを述べた。第二部の目論見は、上記の検討作業の実施結果として一体何が残るのか、という問いかけに他ならない。

本巻では、それらの作業を行っても消去しきれない「何か貴いもの」が日本に存在するということを論証したい。

「何か貴いもの」とは、究極の存在＝神に他ならない。元来日本人は言挙げしないことを信条としてきた。しかしながら、筆者は大いに言挙げをしようと決心した。何故なら、ここ日本は神の国だからである。その事実は今まで嚴重に隠されていたことなので、それを発見したものが明らかにならなければならないのだ。

黙々と言挙げせず自らに課せられた勤めを為すというのが、我々日本人が長い歴史の中で培った美德である。だが、黙っていることによつて諸国民から誤解されたまま、あるいは、理解されないままでは、日本人が本来持っている美德が美德としても認識されず、単に優柔不断な民族だと軽んじられるだけの存在になってしまう。

現に今の日本はアメリカ（を支配する影の世界政府）の言いなりで、どんな無理難題を言われても「分かりました」、「はい、やります」しか言えない存在となり果てていではないか。それを卑下して「ポチ」的な生き方と呼ぶ。

何でも「ご無理ごもつとも」と言いなりになる犬のポチ的生き方ではなく、「人が何と言おうが、僕は僕、ワタシはワタシ」の猫的な生き方の方が、今の日本にとって薬になるのではないか。そろそろ日本人は、「これが日本

流だ」とはつきり分かるような生き方を世界に対して示すべき時期なのではないかと思う。

CSのミステリーチャンネルをよく見ているが、我慢ができないことがある。それは、英国ミステリー番組に対する異様な紹介の仕方に対してである。何かといえば「英国ミステリー」とか「イギリスの推理作家」などと、ことあるごとにキーワードである「英国」や「イギリス」を、わざとらしく入れていくことだ。英国ミステリーは質が高く面白いのでよく見るのだが、紹介の仕方が洗脳的なので気に入らない。

見聞きするたびに、「TVの世界は完全に日本ではなくなっている」ことが分かり、悔しさと怒りがこみ上げてくるのだ。この「英国」や「イギリス」という言葉は、おめでたい日本人向けのマインドコントロール用キーワードなのだ。放送する側の意図としては、「イギリスは素晴らしくて日本は大したことない」という気分を視聴者に対して刷り込みたいのである。「英国王室は世界一立派な王室で、日本の皇室は立派ではない」と思うように仕向けたいのだ。

この種のマインドコントロールテクニクは、一旦分かれば、マスメディアや企業によっていたる機会、いたる場面で使われていることに気付けるようになる。日本人が日本を嫌になっってしまうような暗示を年がら年中かけられているのである。日月神示は次のように、この点については全く正しいことを言っている。

「日本の臣民、悪の計画通りになりて、尻の毛まで抜かれても、まだキづかんか、上からやり方かへて貰はねば、下ばかりでは何うにもならんぞ。上に立ちてゐる人、日に日に悪くなりてきてゐるぞ。」

日本人は戦後一貫して「尻の毛まで抜かれても、まだキづかん」状態に置かれているのだが、みなさんは気が付いておられるだろうか。そろそろ気が付いてしつかりしないと本当に日本がワヤになってしまう（という

か99・9%ワヤになっている!)。一日も早くマスメディアや大企業によるマインドコントロールから脱出していただきたい。

ちなみに、我が家では十年以上も前から、「民放もNHKも見ない。新聞も読まない」を実践している。どうしてお金を払ってまでマインドコントロール情報の詰まったゴミ番組を見る必要がある。見ないのが一番である。くだらない新聞は読まぬが結構である。特にNHKはひどい。単なる営利団体として民放と同じ扱いにするか、国営にして国民のためになる情報だけを放送させればよい。見たくもないNHKに対して受信料を払わなければならぬということ、バカバカしさを通り越して、怒りすら覚えるほどだ。どなたか受信料を払わなくて済む正当な方法をご存じならば、ぜひご教示いただきたい。これは本気のお願いである。

筆者が本書で言いたいのは、こういうことだ。

「日本人が日本人たる個性を自覚して、日本人らしく堂々と生きてゆける方法はないか」

「日本はこんなに素晴らしい国だったのだ」と皆が気付くにはどうしたらよいだろうか?

「日本人が祝日毎に、喜々として日の丸を掲げる」ことができるような、普通の愛国心を持つようにできないものか?

これは筆者が常日頃、自分自身の課題として考え続けてきたことである。そして、最近ようやく日本人への処方箋が分かってきた。

「日本人らしさ」という言葉はあるが、その意味がはっきり分かる人が何人いるだろうか。何をもって日本人の日本人たる所以ゆえんとするか、である。



筆者は、腑抜けになってしまった日本人につける薬を長年にわたって開発してきた。そして、ようやく特効薬が完成した。筆者が発見した日本人につける特効薬は劇薬である。「劇薬である」とは言っても、害はない。むしろ、どんどん元気になる薬である。

その特効薬とは、今浦島太郎である筆者が、龍宮城ならぬ古代史の世界に分け入って見つけてきた宝物である。筆者はその特効薬を「世界神道」と名付けた。

「世界神道」、すなわち、「あじまりかん」の道である。

それでは、弥勒とは一体何か？ 筆者の定義では、弥勒とは個人と人類に完成をもたらす存在である。シリーズ最終巻となる第三部では、日本に秘められていた「あじまりかん」の道こそ、人類を救いへと導く「弥勒の法（＝教え）」であることを語るつもりだ。

極めて大きなテーマへの挑戦であるが故に、いささか言葉足らずとなるかも知れない。その点は筆者の力量不足である。しかし、大神呪「あじまりかん」自体の力が筆者の力量不足を補って余りある実りを貴方にもたらすであろう。

斎藤 敏一



著者略歴… 1953年、福井県勝山市生まれ。現役プログラマー。1972年、大学入学と同時に神の探求を開始。1979年、「弥勒体験(見神)」と同時に社会人となる。映像系技術者兼プログラマーとして研鑽を積む。1983年にプログラマーとして独立。以後、数多くのプログラム開発に従事し、現在に至る。

その間、日本史への神の関与に関して探求を続ける。ここ数年の間に、日本建国が世界的事件であったことを、文献と霊字の両面から確信を持つに至る。本書(処女作)の執筆中に持統天皇霊、イエス霊、太陽神(イエスの天父なる神)、イスラエル国魂、大山祇神、大八洲大神、大綿津見神と交流。本書の内容について極めて重要な情報を受け取る。

趣味は休日(に)料理を作ること、おいしいコーヒーを入れること。猫を四匹飼っており、抱いているのは最年長の「ポアロ」。猫たちから生命の営みや出会いの不思議を毎日教わっている。

日本建国時に仕組まれた 一輪の秘密  
《内容見本》

初版 2017年 7月 吉日

著者 斎藤 敏一

発行者 斎藤 敏一

感想・ご意見は<kan-nushi@jimarikan.com>まで